

氏名	丸山洋司
学位の種類	博士（音楽学）
学位記番号	博音第175号
学位授与年月日	平成22年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉ミティラー地方のヒンドゥー教徒の婚礼歌とその音楽構造
論文等審査委員	
（総合主査）	東京芸術大学 准教授（音楽学部） 植村幸生
（副査）	〃 教授（〃） 塚原康子
（〃）	〃 〃（〃） 大角欣矢
（〃）	大東文化大学 教授 井上貴子

（論文内容の要旨）

本論文では、北インド東部のミティラー地方のヒンドゥー教徒の婚礼歌とその音楽構造について、現地調査で採録した音源資料に基づいて考察した。

ヒンドゥー教徒にとって婚礼は、人生の節目に行う重要な通過儀礼である。サンスクリット語で、通過儀礼にあたる語は「サンスカーラ」である。サンスカーラとは、もともと「清めること」を意味する語で、人間がある段階を生きている間にためこんだ穢れを落とし、浄化された状態になって次の段階に進むために必要な儀礼である。

ミティラー地方は、北インド東部を流れるガンジス川の中流域に位置し、古来のヒンドゥー教が根付いている保守的な地域である。この地方のヒンドゥー教徒は、古くから伝承してきた様式に基づいて婚礼を執り行う。婚礼は婚約式から結婚式まで約一ヶ月かけて行われる大きな行事で、神々の礼拝、司祭によるヴェーダ聖典の詠唱、歌唱などの儀礼行為が行われる。歌唱は婚礼の全過程で行われる。歌の数は四十曲から五十曲におよび、宗教的な内容のもの、儀礼の作業を説明するもの、別離を嘆くもの、冗談をこめて花婿や花婿の親族の男性をからかうものなど、歌詞の内容は様々である。こうした婚礼歌は、伝統的に既婚の女性たちによって歌われてきた。その理由を、「既婚の女性は吉祥な存在であり、彼女たちの歌唱が神々を喜ばせるからだ」と、現地の人々は説明している。

ミティラー地方に限らず、北インドの様々な地域のヒンドゥー教徒の婚礼では、既婚の女性たちが集団で歌う習慣がある。特にガンジス川流域に伝承されてきたヒンドゥー教徒の婚礼歌をとりあげた研究は、これまでもなされてきた。しかし、先行研究においては、婚礼歌の音楽構造に関する検討が、以下の二つの点で不十分であったと考えられるため、本論文ではそれらの点を補足した。

第一に、先行研究は同一の歌唱者たちが一回の婚礼で歌う一連の歌すべての歌詞対訳と採譜を作成していなかった。このためそれぞれの婚礼歌が儀礼の進行過程のどの段階で歌われるのか、またその音楽構造がどのように変化するのが不明であった。本論文では、別冊付録として提出した四十曲の婚礼歌の歌詞対訳・採譜に基づいて、婚礼の進行過程と婚礼歌の音楽構造の結びつきを明らかにした。

第二に、先行研究では婚礼歌がいかに技巧的に創作されたものであるのかが十分に検討されなかった。婚礼歌を歌うとき、女性たちは楽譜や文字に頼ることなく、即興で歌う。歌詞構造や音楽構造の基本はくり返しであり、一見すると単純なものであるが、個々の歌の歌詞や音楽構造を詳しく分析していくと、それぞれの歌が様々な技巧を駆使して創作されたものであることに気づかされる。本論文では、このような婚礼歌の創作上の技巧を、分析を通して明らかにした。

序章にあたる第一章では、まず「婚礼歌」という言葉の定義を明らかにした。次にヒンドゥー教徒の

婚礼歌に関する先行研究を踏まえ、本論文がそれらの研究で十分に検討されなかった部分を補足するものであることを示した。さらに、2002年7月から2004年6月、2006年8月から2007年7月にかけて、インドの首都デリーのガンダルヴァ音楽院に留学中に行った現地調査の経緯を記した。

第二・三章では、ミティラー地方のヒンドゥー教徒の婚礼歌について理解するために必要な基礎的な知識をまとめた。第二章で地理、歴史、言語について概説し、第三章でヒンドゥー教の信仰形態について検討した。第四章は婚礼の過程についての民族誌的記述である。私が現地で調査した三つの婚礼を比較しながら、様々な儀礼次第が執り行われる様子と、女性たちがどのような場面でどのように歌うのかを記述した。第五章では、どのような歌詞を持つ歌が、婚礼の進行過程のどの場面で歌われるのかを検討した。第六章では、婚礼歌の旋律の装飾法、リズム構造、速度という音楽構造の三要素が、歌詞の内容やそれぞれの歌が歌われる場面に対応してどのように変化するのかを分析し、そのような変化に歌い手である女性たちのどのような意図が見出されるかを解釈した。第七章では、歌詞にくり返しや慣用表現が多用され、それぞれの歌詞連に同じ旋律があてがわれているために、楽譜や文字に頼ることなく即座に、女性たちが婚礼歌を歌うことができること、さらに個々の歌は、技巧を駆使して創作されたものであるがゆえに、歌唱者と聴取者の両方にとって、魅力的なものとして楽しまれていることを明らかにした。以上の結論として、第八章では、婚礼の進行過程のどの場面で歌われるかによって歌の音楽構造が変化すること、歌が歌詞面と音楽面の両方で技巧的に創作されたものであることを指摘した。

(総合審査結果の要旨)

本研究は、北インド東部のミティラー地方のヒンドゥー教徒の婚礼歌を対象として、婚礼の過程と音楽様式との対応関係、および婚礼歌の音楽構造上の特質を分析したものである。

ここで婚礼歌とは、執筆者によれば、およそ一ヶ月に及ぶ婚礼の過程で既婚の女性たちによって歌われる歌を包括的に指すものである。本研究の資料となる婚礼歌は執筆者がインドにのべ3年間滞在する間に、ミティラー地方の農村で取材したものである。婚礼そのものの実見は三件、その他に個別のインタビューと演唱収録を果たしている。そこで採録された婚礼歌40曲が採譜され、歌詞対訳とともに論文付録として提出された。

論文は全8章からなる(第1章は序論、第8章は結論にあてられる)。ミティラー地方およびヒンドゥー教を概観する第2・3章に続いて、第4章では婚礼の過程が記述され、第5章では婚礼歌を、その歌詞の内容から七つの類型に分けて婚礼過程との対応関係を検討した。第6章では同じく婚礼歌と婚礼過程との関係を、装飾法、リズム構造、速度といった音楽上の観点から論じた。第7章では、婚礼歌が歌い手である女性たちの創作的な意図を反映するという、前章で表明された仮定に基づき、婚礼歌に頻繁にみられるくり返しや慣用表現を、口頭によって婚礼歌を伝承してきた女性たちによる技巧的な創作の結果であると結論づけた。

本研究は、ヘンリー(1971)および八木(1990)の他には十分な調査報告のない北インド農村における婚礼歌を組織的に収集し資料化を果たした点において一定の成果を挙げたと認められる。歌詞の聞き取りと対訳作成を現地の人々と協同的に行ったことも、フィールド調査のプロセスとしては評価に値する。しかしこの地方における婚礼以外の儀礼歌、および民謡一般などとの関係などは調べられておらず、同地方のヒンドゥー文化における婚礼歌の位置づけは明らかではない。一方、婚礼歌の歌詞・音楽と儀礼との相関については、歌唱が儀礼の「吉祥性」を高め、かつ劇的構造に奉仕することは明らかになったものの、分析の観点が平板に過ぎ、説得力のある議論を構築するに至っていない。特に韻律をはじめとする歌詞の形式面を考慮に入れなかったことは、本研究のテーマからして看過し得ない欠点であった。

本論文はこのように特に分析に関して未成熟な部分を多く残しているものの、現地調査を中心とする執筆者の研究活動の成果としてそれにまとまりを与え、今後の研究に対する方向性を示したという意味

では一定の成果と呼ぶに値するので、厳しい評価ながら合格と認める。